

## 「三教指帰」に見る空海と四国

大本敬久（愛媛県歴史文化博物館専門学芸員／伊予史談会）

**Kūkai and Shikoku as seen in *Sangō Shiiki***  
**Takahisa OMOTO**  
**Curator, Museum of Ehime History and Culture**

In researching the life of Kūkai (Kōbō Daishi), the state of Shikoku in the early Heian period when Kūkai was active and the formation and spread of the Kōbō Daishi faith, we should not rely on "traditional historical materials" such as the later Kūkai and Kōbō Daishi biographies, but should base our findings on "primary historical materials" that were established between the ninth and tenth centuries. However, if we examine previous studies, we will find that many are not sufficiently advanced in terms of literature criticism and textual research nor are they based on historical materials that have not yet been evaluated. One of these materials is the *Sangō Shiiki* that Kūkai wrote when he was twenty-four years old. In recent years, there have been numerous discussions on whether this historical material is the genuine work of Kūkai, or a fake document written by someone later. In addition, many of the annotations in the printed version of the *Sangō Shiiki* have different interpretations, such as the problem of the specific location of Kane-no-take as seen in Kamei Kotsuji, the third volume of *Sangō Shiiki*. Some interpret this place as Iyo Province (Ehime Prefecture), specifically as Shussekiji temple on Mt. Izushi, which straddles Yawatahama City and Ozu City in Ehime Prefecture, while others refer to it as Kinpusan in Yamato Province (Nara Prefecture). In this paper, I would like to summarize the recent progress of research on *Sangō Shiiki*, the commentary on Kane-no-take as seen in Kamei Kotsuji, which has a particular relevance to Shikoku, and the changes in interpretation of the word Kane-no-take by arranging it according to the medieval, early modern, and modern periods.

### はじめに

空海の生年は宝亀5年（774）とされる。讃岐国（香川県）に誕生し、15歳で平城京にて母方の舅・阿刀大足のもと儒教を学び、18歳で大学に入る。ところが空海は大学で儒教を主体とする官僚養成中心の学問で衆生を救えるのか悩みはじめ、結局、大学を退学して山林修行の道に入っていく。それが空海の青年期であった。青年期の空海は出身地の四国でも修行を重ね、阿波国（徳島県）大瀧嶽で虚空蔵菩薩求聞持法を修したり、土佐国（高知県）室戸崎で輝く金星が口の中に入ってくるといふ奇瑞を感得したりして、修行を積んだ。そして延暦16年（797）には「三教指帰」を著す。「三教指帰」は「三つの教え」と書くが、儒教、道教、仏教の三つの教えのうち、どれが一番優れているのか、そして仏教が優れていることを結論として書いた史料である。執筆した時、空海は24歳であった。しかしその後、24歳から31歳までの約7年間はどのように行動していたのか、当時の史料には全く現れず、その事績はわかっていない。恐らく西日本各地を修行していたと思われるが、突如、31歳のときに再度史料上に現れる。それが遣唐使に留学僧として随行した入唐であり、長安では、延暦24年（805）に青龍寺にて恵果和尚に出会い、真言密教を学んで日本に持ち帰ることになり、国内に真言密教を広めていく。その後、高野山を開創したり、京都の東寺を給預されたり、そして嵯峨天皇、淳和天皇と関わりが深く、宮中にも真言密教を広めていったのが空海の生涯であった。空海は承和2年（835）に高野山で亡くなるが、そのことは当時の国史である「続日本後紀」にも記載されている。<sup>(1)</sup>

この空海に関する研究は、なるべく後世の空海伝、弘法大師伝などの「伝承史料」に依拠せず、空海の時代、つまり9世紀もしくは10世紀前半までに書かれたり編纂されたいわゆる「一次史料」をもとに論じられることが求められるが、<sup>(2)</sup>これまで一次史料であると当たり前のように入れられてきた史料について

吟味したり、近年の先行研究を確認してみると、それぞれの文献批判、テキスト研究は充分に進んでいないものもある。その一つが「三教指帰」であり、この約20年の間に、これが空海の真作なのか後世の人物による偽撰なのかなど、数多くの論考が提出されている。<sup>(3)</sup>

また、「三教指帰」を活字化した刊行物の注釈でもその解釈は異なっているものも多く、その一事例が巻下「仮名乞児論」に見える「金巖」の比定地の問題である。これを伊予国（愛媛県）とし、具体的には愛媛県八幡浜市と大洲市にまたがる出石山にある金山出石寺であると解釈するものもあれば、別の解釈として大和国（奈良県）金峰山とする説を紹介する刊行物も数多く見受けられる。

このように、一般には「若き日の空海の出家宣言の書」とも称される「三教指帰」であるが、空海が著したもののなのかといったテキスト批判の問題と、「三教指帰」の数多くの注釈書、解説書によって解釈が異なっているという課題があり、本稿では、その二点の問題について、近年の研究の進展状況や、特に巻下「仮名乞児論」の「金巖」等の、四国に関する史料注釈、解釈の変遷についてまとめておきたい。

## 1 「三教指帰」とは

「三教指帰」は上（序文含む）・中・下の3巻で構成され、空海が延暦16年（797）に著したものとされる。「三教」とは儒教、道教、仏教の三つ教えのことであり、巻上では序文を記し、執筆の動機や自らの履歴を紹介し、次いで「亀毛先生論」でまず儒教を紹介し、巻中の「虚亡隠士論」で道教の立場から批判し、巻下の「仮名乞児論」にて、仏教の立場から道教を批判し、仏教が最もすぐれている事を戯曲風に著述している。「三教指帰」の名称（書名）は序文に「勅成三巻、名曰三教指帰」とあり、「三教指帰」が3巻で成立していたことが明示されている。<sup>(4)</sup> 空海卒伝である「続日本後紀」承和2年（835）3月庚午（25日）条にも、「法師者、讃岐国多度郡人、俗姓佐伯直、年十五就舅従五位下阿刀宿祢大足、読習文書、十八遊学槐市、時有一沙門、呈示虚空蔵求聞持法。其経説、若人依法、読此真言一百万遍、乃得一切経法、文義諳記、於是信大聖之誠言、飛焰於鑽燧、攀躋阿波国大瀧之嶽、勤念土左国室戸之崎、幽谷応聲、明星来影、自此慧解日新、下筆成文、世伝、三教論、是信宿問所撰也」とあり。<sup>(5)</sup> 本記事には「三教指帰」とは現れないものの「三教論」と記されており、それが「世伝」、つまり世間に流布していたことが記されている。空海は巻上序文の中で「唯写憤懣之逸気、誰望他家之披覧」と書いており、自らの憤懣、つまり儒教で示される五常の索（大学を修め、官僚として生きる道）で自分を縛ろうとする周囲の反対に対しての反発心から著したもので、他人に見せるために著したものではないと言うが、実際には朝廷が編纂した「続日本後紀」に「世伝」とあり、「三教論」が空海の存命中に既に広く知られていたことは確実だといえる。

## 2 「三教指帰」と「聾瞽指帰」

現在、高野山金剛峯寺に所蔵され、国宝に指定されている空海自筆の「聾瞽指帰」（2巻）はもともと平安時代から高野山にて保管されていたわけではなく、嵯峨天皇に献上され、嵯峨離宮、仙洞御所、大覚寺と伝承され、西芳寺、仁和寺本院の経蔵に移り、その後、堺の前田仲源五郎が入手して天文5年（1536）に金剛峯寺に寄進し、今日に至るとされている。<sup>(6)</sup> 「聾瞽指帰」は「三教指帰」の草稿本とされるが、書道史の間で真蹟か否かの論争があるものの、歴史学、宗教史、仏教史の立場での「聾瞽指帰」真蹟否定説は、際立って見られるわけではなく、<sup>(7)</sup> 「三教指帰」が「聾瞽指帰」を後次的に改められたものであることは通説となっている。「聾瞽指帰」の自序の文章と末尾の「十韻の詩」とが「三教指帰」とは異なり、それがいつ書き改められたものか、時期は明らかではないが、<sup>(8)</sup> 「続日本後紀」に「三教指帰」の序文の文章の一部が引用されており、「世伝」の「三教論」を記したことが明記されていることを考えれば、承和2年（835）までの空海生存中にみずから筆を加えたものであることは確実であろう。<sup>(9)</sup> なお、「聾瞽指帰」の写本は確認されておらず、孤本的存在であり、世間に伝わった「三教指帰」とは対照的である。

## 3 「三教指帰」の写本・刊本

現在、「三教指帰」の原本は現存していないが、写本、刊本については数多く、『日本古典文学大系 三教指帰 性霊集』の解説・凡例等に写本、刊本が挙げられており、<sup>(10)</sup> 天理大学図書館蔵の仁平4年（1154）の書写本が古写本として知られる。大谷大学図書館蔵の「三教指帰注集」は厳密には写本ではなく注釈書であり

「成安注」と称される。これは天理大学図書館蔵仁平4年本よりも古く、その成立は寛治2年(1088)であり、書写年代が長承2年(1133)から数年間とされ、注釈文だけではなく「三教指帰」本文も引用しており良質な古写本としても扱うことが可能である。なお、『日本古典文学大系』に「現存最古の古抄本」と紹介されている「敦光注」(「三教指帰注」霊友会所蔵)は、長元2年(1029)に勝賢が抄出したものであり、それ以前に敦光が6巻の抄を作ったとされてきたが、「長元二年」は「長寛二年(1164)」と解すべきであり「最古」ではないと指摘されている<sup>11)</sup>。そして『日本古典文学大系』の底本となっているのが建長5年(1253)高野板建長刊本(高野山金剛三昧院蔵)であるが、『大系』刊行の昭和40年から写本研究も進んでおり、本稿ではその詳細には触れないが、今後、「三教指帰」のテキストを引用する場合には『大系』に頼らず、他写本との比較・確認作業も必要となってくる。

江戸期以降になると、「三教指帰」の注釈が数種類刊行され、広く流布するようになる。その代表的なものが運敞『三教指帰註刪補』(略称『三教指帰註』)である。万治2年(1659)板で、詳細かつ最も権威のある注解書として江戸時代を通じて流布し、『真言宗全書』40巻にも所収されている。また、宝永4年(1707)刊の梅国泰音『三教指帰刪補鈔』や正徳3年(1713)刊の通玄『三教指帰簡注』も明治時代中期まで再板が続くほど普及し、こちらも『真言宗全書』第40巻に所収されている。近代になると「三教指帰」の注釈は、昭和10年(1935)刊の加藤精神訳註『三教指帰』(岩波文庫)、そして昭和40年(1965)刊の渡邊照宏、宮坂宥勝校注『日本古典文学大系 三教指帰 性霊集』(岩波書店)が広く利用されている。なお、昭和59年(1984)刊の『弘法大師空海全集』第6巻(筑摩書房)にも「三教指帰」の詳細な注釈があるが、底本の表記がなく、『大系』などの活字本を基に編纂されたと思われる、注釈自体は参考になるものの、テキストの引用等では活用には留意しなければならない。

#### 4 「三教指帰」真作・偽撰論争

空海の生存中や没後間もなくに成立したとされてきた空海関連史料に「空海僧都伝」や「御遺告二十五ヶ条」(以下「御遺告」)がある。武内孝善『「空海僧都伝」と「遺告二十五ヶ条」』によると<sup>12)</sup>「空海僧都伝」は、『弘法大師全集』首巻や<sup>13)</sup>『弘法大師伝全集』第一といった活字本の巻首の題下に「真済記」とあり<sup>14)</sup>、巻末に「承和二年十月二日」と記されているものの、鎌倉時代の写本と思われる真福寺大須文庫蔵本に題下には「相伝云真済僧正云々」とあり、巻末の年紀は見られないように、後世の伝承に基づいて著者が空海の弟子である真済とされてきたが、現在では真済の真撰ではないとする見解が有力とされている。「御遺告」も江戸時代までは空海真撰の遺言状とみなされてきたが、武内孝善『「御遺告」の成立年代』によると<sup>15)</sup>、その成立は弘法大師の諡号が下賜された延喜21年(921)以前とされてきたが、現在では、この武内氏論文によって、10世紀前半から安和2年(969)の間とされている。このように、空海に関する史料批判は、近年、盛んになってきており、そして「三教指帰」についても例外ではない。

実は「御遺告」が後世の成立である見解が強くなってきた事で、「三教指帰」も影響を受ける事になる。従来、「三教指帰」は延暦16年(797)に成立し、その草稿本とされる「聾瞽指帰」は、「御遺告」の記述により20歳以前に成立されたという解釈もあった。「御遺告」に「因茲作三教指帰三巻。成近士号称無空。(中略)朝暮懺悔及于二十年」の記述が根拠となっていたからである<sup>16)</sup>。しかし「御遺告」後世成立説により、「聾瞽指帰」の成立がやはり延暦16年であり、「三教指帰」への改作はその後とされるようになった。この点は米田弘仁『「聾瞽指帰」『三教指帰』研究の現状と諸問題』(『密教文化』193号、1996年)、同『「三教指帰」の真偽問題』(『密教文化』194号、1996年)に詳しく、近年の研究では、「聾瞽指帰」については延暦16年の成立とする点はほぼ一致している。

そして河内昭圓は、「聾瞽指帰」は「序文」、「本文」、「十韻詩」が駢儷体で書かれて統一感が見られるのに対し、「三教指帰」の「序文」が「本文」に比べて散文的で、統一感が見られないと指摘している<sup>17)</sup>、その一例として『聾瞽指帰』では「南閭浮提陽谷」に「日本」と自注するなど、装飾に満ちた本文と地名を併せて表現するのに対し、序文の中に見える「阿国大瀧嶽」、「土州室戸崎」という直截的表現には大きな隔りがあると指摘している。また、「空海僧都伝」、「御遺告」と「三教指帰」の関係にも触れ、これらに空海が「三教指帰三巻」を著したと明記されているが、寛平7年(895)成立とされる「贈大僧正空海和上傳記」では「三教指帰」に触れておらず、長保4年(1002)成立とされる「弘法大師伝」が「御遺告」を引用して



「三教指帰三卷」の記述があることから、河内は「三教指帰」が10世紀中葉に偽撰されたと推定した。なお、その論文の注記で、成立の時期については「弘法大師伝」の成立時期の再検討なども含めると、「三教指帰」成立を済漣の時代（1025～1115）まで下がる可能性を指摘しているが、既に「三教指帰」が触れられている「御遺告」の成立時期を安和2年（969）以前の成立とする研究成果からすれば、済漣の時代まで下るのは考えにくいだろう。

河内の偽撰説の提示に対して、加地伸行「大師と中国思想と—『指帰』両序に寄せて—」（『密教大系 第五卷 日本密教Ⅱ』法蔵館、1994年）、大柴慎一郎『「三教指帰」真作説』（『密教文化』204号、2000年）、大柴清圓「再論『三教指帰』真作説」（『高野山大学密教文化研究所紀要』29号、2016年）等、真作説も提示され、真偽論争が現在も続いており、今後、ますます議論が深化するだけの材料が整った研究段階といえるが、筆者としては、「続日本後紀」空海卒伝の「世伝」の「三教論」の記述は動かしがたく、空海生存中の真作と見るのが妥当であり、序文については本文との文体の相違もあり、後世の偽撰の可能性も無いわけではないと考えている。

## 5 「三教指帰」と四国

空海が青年期に四国で修行をしていることは「三教指帰」の記述から判断できるが、それは延暦年間のことである。「三教指帰」には、四国での具体的な修行地として序文に「阿国大瀧嶽」、「土州室戸崎」が挙げられている。「阿国大瀧嶽」は、徳島県阿南市加茂町にある第21番札所太龍寺のある太龍寺山であり、「土州室戸崎」は高知県室戸市の室戸岬であるとされる。そして「三教指帰」巻下「仮名乞児論」に、仮名乞児が虚亡隠士から出自を問われたところの「然頃日間、刹那幻住於南閭浮提陽谷、輪王所化之下、玉藻所帰之嶋、櫟楠蔽日之浦、未就所思、忽経三八春秋也」とあり、「聾瞽指帰」では「玉藻所帰之嶋」に「賛岐」（つまり讃岐国）、「櫟楠蔽日之浦」に「多度」と自注している。讃岐国多度郡に生まれて「三八」つまり24年と歳月が流れたと表現し、空海自らが讃岐出身であることを強調している。また、修行地として「金巖」と「石峯」が登場し、「金巖」は諸説あるが、愛媛県の金山出石寺（出石山）とも比定され、「石峯」は愛媛県の石鎚山とされる。「大瀧嶽」、「室戸崎」、「石峯」については解釈が固定化、定説化しているが「金巖」については、その比定地は「三教指帰」の注釈書、解説書でも様々であり、ここでは「金巖」についての解釈をまとめておきたい。なお、出石寺は愛媛県八幡浜市と大洲市との境、標高812メートルの出石山頂上に位置する。金山と号し、真言宗御室派別格本山、四国別格霊場第7番札所で、本尊に千手観世音が祀られ50年に一度開帳される。寺伝では養老2年（718）、猊師が山中から湧出した千手観音と石像を祀ったのが寺の始めであり、大同2年（807）に空海が修行したと伝えられる。江戸時代には宇和島、大洲、新谷各藩主の帰依が深く、藩の祈禱所であった。昭和16年（1941）に全焼したが、その後復興し、現在は本堂、大師堂、護摩堂、客殿などがあり、参道には空海が修行したという伝説が残る護摩が石、脇には熊野神社が祀られている。信仰圏は広く、愛媛県内だけではなく瀬戸内海を隔てた山口県や豊後水道を隔てた大分県にまで各地に出石講が組織され、参詣者も多い寺院である。

まず、昭和40年（1965）に刊行された『日本古典文学大系 三教指帰 性霊集』に「金巖」の頭注として「自注に『加禰能太氣』とある。大和金峰山か、伊予の金山出石寺か。後者と思われる」とあり、「石峯」については「自注『伊志都知能太氣』。伊予の石鎚山」とある。「石峯」は石鎚山であると断定し、「金巖」は大和国金峰山説と伊予国金山出石寺説の二つを表記し、後者、つまり伊予国金山出石寺と思われると記している。この注釈の典拠の一つは、梅国泰音『三教指帰刪補鈔』（宝永3年（1706）成立）である。この『三教指帰刪補鈔』にて「聾瞽指帰」の中で空海自らが訓注したものを抽出し、解説を加えているが、そこに「金巖」や「石峯」についての空海の訓注を紹介し、そしてそれが伊予国にあると記している。その『三教指帰刪補鈔』で訓注の解説を挙げると、「或登金巖【加禰乃太氣】。按金巖ハ在伊予国。」「或跨石峯【伊志都知能太氣】。按石鎚嶽ハ在伊予国。」とあり、「金巖」、「石峯」が伊予国に在ると江戸時代には解釈されている。これをもとに『日本古典文学大系』が金山出石寺説を有力と注釈したと考えられる。

また、昭和10（1935）年刊行の加藤精神訳註『三教指帰』（岩波文庫）では、「金巖＝大師の自註に「加禰能太氣」とあり。大和の金峰山か。或は伊予の金山出石寺か。」「石峯＝大師自註に「伊志都知能太氣」とあり。伊予の石鎚か。」とあり、昭和10年の段階で、『大系』と同様に大和国金峰山と伊予国金山出石寺を併

記している。この昭和10年の岩波文庫本に金峰山説が出てきているが、それ以前に金峰山説が紹介された注釈は確認できず、岩波文庫本によって、金峰山説が登場、もしくは定着した可能性がある。

なお、岩波文庫本が刊行された昭和10年には『真言宗全書』第40巻も刊行され、<sup>18</sup> 主要な注釈である「三教勘注抄」、「三教指帰注」、「三教指帰註抄」、「三教指帰註刪補」、「三教指帰簡註」が翻刻されている。中世以前成立の注釈（いわゆる古注）には「金巖」・「石峯」の比定地に関する記述は見られないものの、近世に入って刊行された『三教指帰簡註』には「金巖」と「石峯」の注釈がなされている。<sup>19</sup> この注釈は江戸時代だけではなく、明治20年代まで版を重ね、「三教指帰」の主要注釈書として広く普及したものである。この『三教指帰簡註』には「新鈔曰。真筆之本金巖之下有加禰乃太氣之註。石峯之下有伊志都知能太氣之註。金巖石槌嶽並在予州」と「金巖」と「石峯」が伊予国に在ると明記されており、江戸時代から明治時代にかけてこの解釈が広く知られていた。先に挙げた岩波文庫本も校注にあたり著者の加藤精神は『三教指帰簡註』を参考としており、「金巖」の伊予国金山出石寺説の典拠としたと考えられる。

そして昭和59年(1984)刊行の『弘法大師空海全集』第6巻(筑摩書房)では「三教指帰」巻下の現代語訳に「あるときは金の巖に登って雪に会って困りはて、あるときは伊予の石槌の嶽に登って断食して苦勞した。」とある。ここでは「金巖」については具体的にどこか示していないが、「石峯」については「伊予の石槌」と愛媛県の石鎚山だと特定して現代語訳している。そして「金巖」の注として「金巖 大和金峯山か、伊予の金山出石寺か。両説がある。近年では前者とみる説が多い。」とあり、<sup>20</sup>『日本古典文学大系』では後者と思われるとされていたが、逆転して大和国金峰山説を有力としている。このような注釈や解説が『全集』に載ることの影響力は大きく、『全集』の発行以降は金巖＝金峰山説が有力とする扱い方が現在まで多くなっている。

以上、弘法大師空海の青年期の修行地「金巖」についてその解釈を時代ごとに確認すると、中世以前には具体的な比定地は現れないものの、江戸時代には伊予国(金山出石寺)説が通説化していたことがわかる。そして昭和以降の岩波文庫本や『弘法大師空海全集』の刊行等により金峰山説が登場し、伊予国説が見られなくなっている。伊予国説は新史料の発見により否定されたわけではなく、解釈の問題で金峰山説が有力とされたという状況であり、この件の実証的研究は今後も追及されるべきといえるだろう。

## おわりに

本稿では「三教指帰」の写本、刊本などの書誌情報や注釈書について各時代のものを紹介した。近年、「三教指帰」について空海の実作なのか、没後に撰述された偽撰なのか議論が活発化し、「三教指帰注集」(寛治2年(1088)成立、長承2年(1133)頃写)が注釈文に加えて本文も引用されているため、これまで鎌倉時代の高野板(建長本)が底本とされることが多かった「三教指帰」研究の基礎状況が変化しつつある。ここでは「三教指帰注集」と建長本の比較等は紙幅の都合で紹介しないが、空海研究では各写本、注釈書の原典確認を踏まえた上での議論が今後必要になるだろう。

また、筆者は「三教指帰」が空海生存中の実作と考えるが、仮に「三教指帰」の序文については偽撰であり10世紀後半までの成立だとすると、四国での空海の修行地についても再考すべき点が出てくる。つまり、修行地ではないが生誕地として、まず「玉藻所帰之島(讃岐国)櫛楠蔽日之浦(多度郡)」がある。これは「聾瞽指帰」、「三教指帰」とともに本文中に見えるものであり、この地名は「聾瞽指帰」成立の延暦16年(797)段階から存在した記述として確実であろう。そして双方の本文で空海の修行地として見えるのが「金巖」、「石峯」がある。これらは具体的な比定地は明記されていないが、「聾瞽指帰」に「加禰乃太氣」、「伊志都知能太氣」と空海による自注が記されて具体的な場所を示しているといえることができ、その解釈として江戸時代以降の注釈書に、金巖は伊予国金山出石寺説、大和国金峰山説、石峯は伊予国石鎚山説が出てくる。つまり史料として延暦16年の「聾瞽指帰」成立時に見えるものの、後世にその解釈として、四国の修行地とされるものである。

そして「三教指帰」巻上の序文に見える「阿国大瀧嶽」、「土州室戸崎」である。これらは具体的な地名であり、確実に四国での修行地といえるが、「聾瞽指帰」には見えない記述である。「三教指帰」序文が後世の偽撰とされるなら、その「大瀧嶽」、「室戸崎」の初出は「続日本後紀」承和2年(835)3月25日条になり、その時点には確認できる修行地といえる。つまり、これまで「三教指帰」序文に見えることで、延暦16年に

は「大瀧嶽」、「室戸崎」にて修行をしていたと扱われてきたが、厳密に言えば「続日本後紀」が初出である可能性があることも考慮すべきであろう。いずれにせよ、空海が讃岐国多度に生まれ、阿波国「大瀧嶽」、土佐国「室戸崎」や、伊予国と推定される「金巖」、「石峯」でも修行を重ねたことは、伝承、伝説の類ではなく、史料上、9世紀前半の段階で確認することができることは強調しておきたい。これらは四国遍路や弘法大師信仰の歴史を語る上で、実証性の高い史実として提示できるものといえるだろう。

## 註

- (1) 空海の生涯については拙稿「1200年前の空海」(愛媛県歴史文化博物館編『平成26年度特別展図録 弘法大師空海展』2014年)、おなじく拙稿「弘法大師空海の生涯」(『宇摩史談』103号、2015年)にて紹介している。
- (2) このことに関する筆者の作業としては拙稿「弘法大師空海と四国遍路開創伝承」(愛媛大学四国遍路・世界の巡礼研究センター編『四国遍路の世界』筑摩書房、2020年、137～154頁)がある。
- (3) 近年、空海に関する史実・実証的な研究は進展しており、その例として上山春平『空海(朝日評伝選)』(朝日新聞出版、1981年)、渡邊照宏・宮坂宥勝『沙門空海』(ちくま学芸文庫、1993年)、『国文学解釈と鑑賞 特集弘法大師空海』2001年5月号(至文堂、2001年)、武内孝善『弘法大師空海の研究』(吉川弘文館、2006年)、寺内浩「古代の四国遍路」(四国遍路と世界の巡礼研究会編『四国遍路と世界の巡礼』法蔵館、2007年)、武内孝善『空海伝の研究 後半生の軌跡と思想』(吉川弘文館、2015年)、河内昭圓『三教指帰と空海－偽撰の文章論』(法蔵館、2017年)、寺内浩「弘法大師空海と満濃池修築」(『愛媛大学法文学部論集人文学編』46号、2019年)、西本昌弘『空海と弘仁皇帝の時代』(塙書房、2020年)などがある。また、拙稿『三教指帰』と空海の修行地に関する基礎的考察(『愛媛県歴史文化博物館研究紀要』、2015年)にて「三教指帰」と「金巖」については考察している。
- (4) 渡邊照宏、宮坂宥勝校注『日本古典文学大系71 三教指帰 性霊集』(岩波書店、1965年、87頁)。
- (5) 『新訂増補国史大系 続日本後紀』(吉川弘文館、1974年、38～39頁)。
- (6) 村岡空「聾瞽指帰(序・十韻の詩)」解説(『弘法大師空海全集』第6巻、筑摩書房、1984年)。
- (7) 飯島太千雄「空海書『聾瞽指帰』の重要性」(『日本歴史』596号、1998年)。
- (8) 『三教指帰』と比較すると『聾瞽指帰』の文章は、自序の文章と末尾の「十韻の詩」が異なる。本文の異同は、筆者が『日本古典文学大系 三教指帰』で確認したところ290ヶ所にのぼる。
- (9) 福永光司『日本の名著 3 最澄 空海』(中央公論社、1977年)。
- (10) 註(4)に同じ。加えて、写本研究には、太田次男「聾瞽指帰と三教指帰一付・天理図書館蔵仁平四年写本の翻字一」(『成田山仏教研究所紀要』第12号、成田山新勝寺、1989年)、佐藤義寛『三教指帰注集の研究 大谷大学図書館蔵』(大谷大学、1992年)がある。
- (11) 太田次男・稲谷祐宣「平安末写三教指帰敦光注について一解題と翻印一」(『史学』41-1、慶應義塾大学、1968年)。
- (12) 武内孝善『『空海僧都伝』と『遺告二十五ヶ条』』(『密教文化』218号、2007年)。
- (13) 『弘法大師全集』首巻(増補3版、高野山大学密教文化研究所、1967年)。
- (14) 『弘法大師伝全集』第1(六大新報社、1935年)。
- (15) 武内孝善『『御遺告』の成立年代』(『密教研究』43号、2011年)。
- (16) 密教文化研究所弘法大師著作研究会編『定本弘法大師全集』7巻(密教文化研究所、1992年、351～2頁)。
- (17) 河内昭圓『『三教指帰』偽撰説の提示』(『大谷大学研究年報』45号、1994年)。
- (18) 高岡隆心編輯『真言宗全書』第40巻(真言宗全書刊行会、1935年)。
- (19) 註(18)に同じ。351頁。
- (20) 弘法大師空海全集編輯委員会編『弘法大師空海全集』第6巻(筑摩書房、1984年、67頁)。